

## FD 関連研修会 参加報告書

主 催	大学コンソーシアム京都
企画名称・テーマ	第17回FDフォーラム
開催日時<会場>	2012年3月3日(土)、4日(日) <京都産業大学>
参加者所属	教学部 教育開発課

### 参加報告

#### 【1日目/シンポジウム】

3月4日・5日、京都産業大学を会場に大学コンソーシアム京都が主催する「第17回FDフォーラム」に参加した。

初日のシンポジウムは「大学におけるキャリア教育を考える ～企業が求める人材って、大学で育成しないとだめ？」をテーマに、児美川孝一郎氏（法政大学キャリアデザイン学部 教授）、深澤晶久氏（株式会社資生堂 人事部人材開発室長兼キャリアデザインセンター長兼グローバル人事グループリーダー）、松高政氏（京都産業大学 経営学部 准教授キャリア教育研究開発センター運営委員）より事例報告を交えながらキャリア教育のありようについて活発な議論がおこなわれた。

#### <児美川孝一郎氏>

児美川氏からは、大学で行われているキャリア教育の歴史を振り返り、大学設置基準改正で義務化されたことの大学への影響、キャリア支援発展の歴史的流れ（正課外から正課へ）、現在の就職活動とキャリア教育の関係について整理がおこなわれた。

また、今後の課題として、企業に適応しうる人間を育成するのではなく、多様な生き方に対応しうるしたたかな能力を育成すべきではないか、との投げかけが行われた。

#### <深澤晶久氏>

深澤晶久氏からは、資生堂で行われている新入社員を対象とした「キャリア研修会」の取り組みが紹介された。

資生堂では、新入社員と大学生が共同しながらキャリア育成をおこなう「フューチャースキルズプロジェクト」に取り組んでいる。

これは、立場や価値観の違う社会人、学生がさまざまな作業（ワーク）を通してキャリア育成を目指すもので、「主体性を引き出す」「実際の社会を知る」「社会に必要な能力を知る」などが到達目標となっている。

深澤晶久氏は産学連携型キャリア教育の実戦経験から、キャリア教育を大学だけの問題とするのではなく、社会全体でキャリア育成することが重要で効果的であると指摘した。

#### <松高政氏>

松高政氏からは、京都産業大学で取り組まれている「産学協働教育（コーオプ教育）」

が紹介された。

これは、企業と大学が共働して若手社員と学生のハイブリッド（混成）による人材育成プログラムで、企業が抱える課題、その対応策、対応策の企画・実施案などを考えさせる内容となっている。

企業側は若手社員に「プロジェクトマネジメント能力の育成」「課題に対する行動力」といった能力を身につけさせることができ、大学側は「組織の仕組みやチームで働くことの難しさ」「企業が抱えている課題」を知ることにより、自身のキャリア育成に役立てる事ができ双方に有益なプログラムである事が紹介された。

結論として、大学生のキャリア育成は社会全体（産官学）が支えるべきものである事、日々の学部教育を改善することで、授業内でもキャリア育成が可能であり、その事を視野に入れたFDが必要となる事を気付かされたシンポジウムであった。

#### 【2日目／第9分科会】

2日目は「大学における『私語』と『沈黙』」をテーマとした第9分科会に参加した。

山形大学の杉原氏からは、私語が発生する理由は多岐にわたるが主には授業が単調であることが多い。その対策としては、グループワークや事前契約によって私語を抑制する事例が紹介された。

また、沈黙については、昨今、学生も多様化しており発表や意見をすることに「抵抗感」を示す学生も少なくないことから、発表への抵抗感をまず取り払う事から始めるべきではないか、と提案した。

早稲田大学の尾澤氏からは、デジタルメディアを使った「私語対策事例」が紹介された。

尾澤氏は私語対策として、①講義と演習、グループワークの適切な組み合わせ、②ミニツツペーパーを用いた理解度の把握、③Twitterを用いたリアルタイムの現状把握、といった手法を用いている。

特にTwitterの活用は、リアルタイムに学生の理解度を把握し即時的なフィードバックを可能とするため、その分学生の集中力も増し私語抑制に役立っているとの報告があった。

最後に、京都文教大学の山本氏からは、フィールドワーク型PBL科目として開講しているプロジェクト科目の活動を中心に報告がなされた。

プロジェクト科目は主に、講義+演習、フィールドワーク、プレゼンテーションという構成になっており中でも「講義+演習」部分が最も私語が懸念される部分である。しかし、90分の構成を講義だけでなく演習も混ぜることで私語抑制に効果があるとの報告がなされた。

今回の分科会の議論では、まず解決策として「授業方法の見直し」があげられた。90分を講義だけで終らず、グループワークやディスカッションなど学生も参加する授業に変えることが効果的だとの結論に至った。

また、講義を受ける際、授業中の私語も沈黙も「学生自らの成長を阻害している要因」であることを、大学が学生に伝達し理解させないと、根本的解決にはならないだろう。